下又白谷下部岩壁

日本各地に悲惨な冷害を及ぼした今年も，僕等にとってはこの上もなく幸運であった。

今まで，幾度となく繰り返されたアタックも，圧倒的なハングと，深いシュルンドに悩まされて来た。しかし多雪な今夏は，その悩みを解決するのに充分であった。

8月7日

奥又から昨日，ベースを徳沢に移したが，今年の徳沢は何と寒い事であろう。

入山して来た添野さんと，午後より偵察がてら谷に入る。10日より合宿があるので，我々に与えられた時間は3日間である。

照りつける陽の下の広いゴーロの行軍は楽ではない。やがて雪渓が現われた。谷が大きく右へ廻り込むと，威圧的な岩壁に囲まれたF1の落口への広大な雪渓がのびていた。例年の取り付点はおろか，その開拓されつつあったルートもはるか雪の下にある。

落口付近は，幅5米もあるシュルンドになっており，岩へ移るのは困難である。落口の左壁のスラブに，1ケ所，岩へ移れそうな個所があるので，そこを取り付き点に選ぶ。

私達は，そこから落口の左上にのびている岩稜の上のテラスに出て，未知の谷を偵察しようと企てた。それには左壁の中央部を100米程登らなければならなかった。

雪崩に洗われていない，風化した花崗岩は，フリクションは効くが，ボルトは効かないと云った状態で，岩質そのものがもろい様であった。

スラブを5米程登り，小さなレッジに出る。そこから右上するクラックを直上して，落口と同高度の，かなり広いテラスについた。

今日は，これ以上は無理として，明日の為にFixをして下って来た。

久しぶりの御馳走に舌づつみを打ちながら楽しい宴であった。

8月8日

朝の陽差しは，快いものである。呼吸をはずませて雪渓を登ってゆく。両岸の白い花崗岩が，陽に映えて美しく輝やいている。

取付きで一服した後，不用の荷をデポして登攀を開始する。

第1ピッチは昨日のFixのおかげで楽に大きなテラスに着いてしまった。上部は，草付き混りの所が，高さ40m程広がり，高さ10m，幅30mのスラブ帯にさえぎられ，その上は，ことごとくハングして灌木帯に到っている。

ルートは正面を登る以外，考えられなかった。比較的ホールド，スタンス共にあり，楽しそうであった。テラス上端を水平に走るバンドを5m程右へゆき，左上するバンド状の岩に移って，テラス正面のクラックに入る。クラックと云ってもV字状で，かろうじて足が止まる程度である。クラックを抜け，やゝ傾斜がなるくなったが，今までより岩が細かく，左上にあるテラスまで，かなりの時間を費してしまった。

上部のルート選択について，なるべくハング帯をさけようと云う事で，灌木テラスの直上の垂直に近い，灌木のガリーを登ろうとした。トップが悪戦苦闘，投げ綱やザイルシュリンゲ等を使って登り切ったが，その上は何一つないテラテラスラブに行手をはばまれてしまった。仕方なく下って来た